

The structure of the lacquer coating remained on a pot from the tomb No.44 at HaDe site, Ulsan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OKADA, Fumio, LEE, Seon-ju, KIM, Min-kyun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059487

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



蔚山下袋 44 号墓より出土した 土器表面に遺存する漆塗膜の構造

岡田文男（京都芸術大学）

イソソジユ

李宣周（韓国伝統文化大学）

キム ミンギョク

金啟均（釜山大学校博物館）

I. はじめに

1991 年と 1992 年の二度にわたって釜山大学校博物館が発掘調査を行った下袋（하대）遺跡は蔚山広域市蔚州区に位置し、青銅器時代から三韓時代にかけての墳墓と集落が形成された大規模な複合遺跡である。このうち 44 号墓は 2 世紀後葉の造営であり、初期木槨墓の資料として三韓時代の発展過程を解明するうえで重要な位置を占めている。

44 号墓は一部盗掘されていたものの、被葬者の装身具類として曲玉、環玉、小玉、水晶製切子玉などの玉類、組合式牛角形把手付壺、菱形集線文と鋸歯文で装飾された台付長頸壺、炉型土器などの土器類、3 点の鉄剣、鉄帽 31 点、鉄鏃 15 点、有刺利器、板状鉄斧、鉄製農工具など大量の鉄器が出土した。この他にも床面から漆の痕跡が確認されており、胎が消失していることから木胎の漆製品が副葬されていた可能性がある。

出土した 3 点の台付長頸壺のうち、1 点に黒漆の痕跡が残っていた。胴の内面を除いて全面に黒漆が

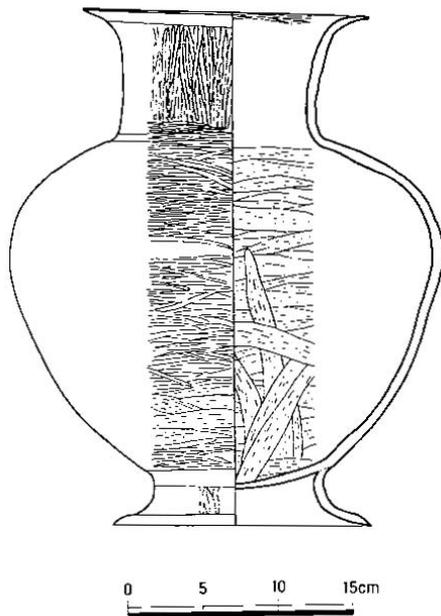


図 1 台付長頸壺実測図

あるが、一部のみ残存しているものとみられ、文様はない。残り 2 点の肩部には集線文が装飾されている。

本稿ではこの台付長頸壺表面に遺存する漆塗膜の構造を紹介し、2 世紀における漆工技術の一端を紹介する。

II. 試料並びに調査の方法

塗膜分析に供した台付長頸壺は、高さ約 34.5cm、口径 19.0cm、胴の最大径 28.7cm、低径 17.0(写真 1, 図 1) であり、土器表面に茶褐色を呈するやや光沢のある塗膜が部分的に遺存する(写真 2)。

臺附長頸壺より剥離した塗膜試料をエポキシ樹脂(主剤: アデカレジジン EP4200、硬化剤: アデカハードナー 4332、配合比 5:2) に包埋し、試料断面を研磨して反射光による観察を行い、次いで研磨面



写真 1 台付長頸壺



写真 2 胴部に遺存した塗膜

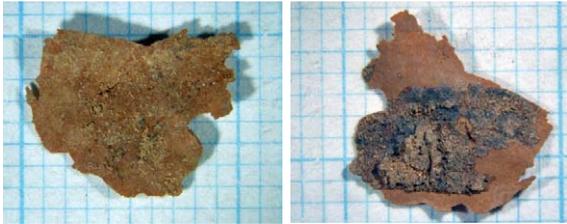


写真3 土器表面より剥離した塗膜片(表面) 写真4 同(土器付着面)



写真5 塗膜断面

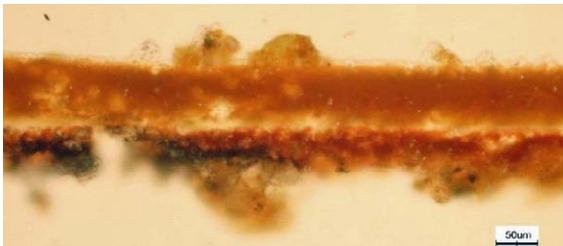


写真6 塗膜断面の拡大



写真7 漆を焼き付けた土器表面の色調

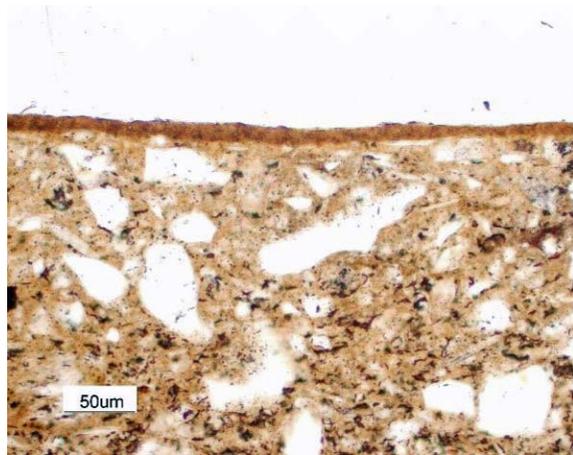


写真8 同、塗膜断面

を鉋物用スライドガラス(厚さ1.2mm)に前述のエポキシ樹脂で接着し、試料の厚さを約20µmまで研磨して生物顕微鏡ならびに走査型電子顕微鏡により観察を行った。

Ⅲ. 結果と考察

写真3は土器表面より剥離した塗膜片の表面であり、塗膜の表面は平滑で、明褐色を呈している。写真4は土器に付着した面であり、土器に接した面は黒色を呈しており、その外側に写真3にみえる明褐色の層が重なっている。写真5は塗膜の断面を薄片にして顕微鏡観察した結果であり、写真6はその拡大である。断面写真5、6により、塗膜は2層で構成されていることがわかる。写真6によると、下層の塗膜のほうが上層よりも薄く、濃色を呈している。さらに両層の断面には大きさの異なる円形の空隙が分散しており、漆の精製度がやや低いことを示している。

通常、目視で黒色を呈した漆の塗膜断面には黒色顔料が混和されていることがあるが、下層の塗膜に黒色顔料は認められなかった。一般に、100℃以上に加熱した器物の表面に漆を塗布すると、黒色顔料

を混和せずとも塗膜は黒色が濃くなる傾向がある。そうした技法を焼き漆と呼び、鉄器や銅器の金属表面に用いることが多い。写真7は土器表面に漆を焼き付けた実験資料であり、漆の色調は黒色を呈している。写真8はその塗膜断面であり、やや褐色を呈している。

以上のような44号墳から出土した台附長頸壺の漆塗膜を調査した結果と実験データを比較してみると、土器表面の下層漆黒色は漆塗布時に顔料を混合したものではなく、漆を高温硬化させる技法である焼き漆の技法が用いられた可能性も考えられる。

原載:

オカダ 후미오・이선주・김민균 2016 「울산 하대 44 호묘 출토 토기표면의 칠도막 구조」『고고광장』18, 부산고고학연구회:169-171. [「蔚山下塚 44 号墓出土土器表面の漆塗膜調査」『考古広場』18, 釜山考古学研究会]

論文公開先(韓国歴史文化調査資料データベース):

<http://www.excavation.co.kr/bookList/view?idx=7293>